

一枚の啓発チラシから…

富山大学人間発達科学部附属中学校 一年 山口 泰成

「僕に何ができるのだろうか。」新聞やテレビなどで、北方領土問題のことが話題になっていくのを目にするたびに、僕は自分に問いかける。

富山駅前で行われていた北方領土返還要求運動の街頭キャンペーンの様子を見て、「僕にも下さい。」と言って自らチラシをもらったのは、小学四年生の時だった。その時「ありがとう。」と、笑顔でチラシを渡されたこと、僕は今でも覚えている。下校途中のランドセルを背負っている僕にもチラシをくれたことが、北方領土問題に関心を持つきっかけとなった。そして、その一枚のチラシを帰りの電車の中で見ていると、知らないおばあさんが、僕の隣に座って、

「北方領土知つとるんだ。まだ小さいがに。」

と言ったかと思うと、ゆっくりと昔話を始めた。おばあさんの住む黒部市は、北方領土と深い関わりがあること、黒

部市や入善町の漁師たちが北方領土に出稼ぎに行き、魚や昆布を沢山採って生活していたという話だった。おばあさんは僕が下車する前に、そっと昆布をくれた。一枚のチラシから、おばあさんとの出会いがあり、そこからまた北方領土のことをほんの少し知ることができた。僕は夕食時、その日の出来事を家族に話した。すると、家族も北方領土は分かるが、残念ながら領土問題については、あまり詳しくなかったのである。その後、自分で本やインターネットで調べたり、北方領土問題に関する新聞記事をスクラップしたり、街頭演説を聞き積極的に署名にも協力した。次第に、僕は北方領土問題を身近な問題として捉えることができるようになっていった。

北方領土とは、日本固有の領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島のことである。しかし、第二次世界大戦直後、ソ連軍によって北方領土は占領され、島に住んでいた日本人は本土に引き揚げさせられた。ソ連崩壊後ロシアに引き継がれた現在も、不法な占拠は続いている。日本は返還を要求しているが、ロシアは実効支配を強めており、島は着々と「ロシア化」が進んでいる。

この北方領土問題について、どれだけ多くの日本国民が関心を持っているのだろうか。僕は、日本は「島国」であ

るために、近隣諸国との間で領土問題を抱えている当事国にも関わらず、「領土」というものに対して意識が低いように思う。このことは、富山県内でも同じことがいえるのではないだろうか。そう感じたのは、僕は今回北方領土問題についての作文を書くにあたり、これまでの作文をすべて読んだ時に感じたのである。作文は、圧倒的に黒部市の中学生の作文なのである。確かに北方領土からの引揚者数が最も多いのは、県内では黒部市である。北方領土についての情報も地元ならば当然多く、実際に島民の方々の生の声が聞けたり、学校の授業でも多く取り上げられるからだろう。しかし僕は、富山県民である以上、地域による温度差なく北方領土問題について考えてもらえる日がくることを期待したい。なぜなら、北方領土は富山県民であった僕達の先人が開拓した大切な領土、元島民の方々にとつてかけがえのない故郷だからである。僕たち国民一人一人が、領土問題を自分の問題として考え、領土問題解決に向けて、啓発活動を推し進めていくこと、そして国民全体で国を動かしていくことが大切だと思う。また、若い世代である僕達が、率先して北方領土問題について正しく理解し、伝え広めていくことを実行していきたい。

最後に、一人でも多く活動に賛同する仲間を増やしてい

かれるよう、来年は是非「北海道派遣団」に参加してみたいと思っている。

北方領土問題対策協会理事長賞

同じ日本の国土

黒部市立高志野中学校 三年 西坂ほのか

私の祖父は、北方領土の元島民です。元島民といっても、北方領土に住んでいたのは幼少期であり、その時のことはほとんど記憶がないそうです。今年の夏、祖父は北方領土を訪問し、元島民の方々のお墓参りをしたり、北方領土の街を散策したりしたそうです。祖父は帰ってきてから私に、北方領土のコンビニに売っていたロシアのジャムを見せてくれました。私は、北方領土にロシアのコンビニがあるという事実を初めて知りました。何故なら、「北方領土は、昔ロシアというところがあった土地である。」というような認識しかなかったからです。祖父の話聞いて、北方領土について詳しく知りたいと思うようになった時、本校の伝統である「北方領土についての調べ学習」が始まりました。私は、「北方領土に住

んでいた人々の暮らし」というテーマを設定し、北方領土資料室の文献等で探究しました。また、祖父の姉にあたる方とお話する機会がありました。領土に住んでいた頃の暮らしについて尋ねる中で、衝撃を受けた内容がありました。祖父の父、つまり私の曾祖父は北方領土で漁師をしていましたが、戦争によって満州でロシア人に捕虜にされたため、家族の中で女性と子供は、歯舞群島の多楽島で生活することになったそうです。当時の多楽島は、美しい花畑が広がり、子供達は友達の家遊びに行く途中に花を摘みながら自然に溶け込んでいたようです。しかし、そんなのどかな島にも、そのうちロシア人が上陸してきて状況が一変します。ロシア人は鉄砲を持って日本人を探し回るため、その度に島民は物陰に隠れたそうです。親は「何があっても絶対に気付かれないように泣いてはいけません。声を出さな。」と厳しく子供を諭していたそうです。ロシア人が上陸してしばらくたったある夜、祖父たち家族はこっそりと多楽島を抜け出し、根室に向かったそうです。私はこの事実を知り、底知れない恐怖を感じました。もし、私が当時の子供だったならば、きっと脅えながら生活していたに違いありません。当時の島民の方々は、私の想像を絶するいたたまれない心境で生活しておられたことが分かりました。

調べ学習の途中の十一月月上旬に、「北方領土出前講座」がありました。根室市の高校生や黒部市在住の元島民の方が来校され、講演会が開かれました。高校生が通う学校では、ロシア語の授業があり、積極的に北方領土の返還要求運動にも参加しているそうです。私とあまり歳の変わらない人たちが、北方領土返還に向けた活動に真剣に取り組んでいることを聞きました。また、元島民の方の講話で私が最も心に残ったのは、「北方領土も私たちの住む黒部市などと同じ国土だということをもっと重く受けとめてほしい。」という言葉でした。私はこの言葉を聞くまで、北方領土問題はどこか他人事のように思っていたことに気付きました。しかし、この言葉を聞いた瞬間、「この問題を他人事にはいけない。これは、これからの若い世代も含め日本国民全員が真摯に向き合っていくべき問題だ。」と強く思いました。だから、私は身近な人に北方領土の歴史や現状について話すなど、小さなことから北方領土返還の活動に貢献したいと思います。

私の祖父も含め、元島民にとって北方領土はかけがえのない大切な故郷だと思います。北方四島の返還に少しでも近づくために、私なりにできることを考え、実行していこうと思います。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

北方領土返還に向けて

魚津市立西部中学校 二年 石崎 優海

「元島民の方に元のくらしを。」

これは、根室市内の中学生と和歌山県の派遣団と共に行った意見交換会で印象に残った言葉です。現在、元島民の方の平均年齢は八十四歳を超え、残された時間が少ない今、どうすればこの問題を解決できるのでしょうか。私は一人でも多くの人に興味、関心を持ってもらい、返還に向け、自分にできることを実行することが解決への一歩だと思います。

私は夏休みに、富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団の一員として、北海道を訪れました。そこでは、富山県では感じることでできない、北方領土に対する思いを感じ取ることができました。

その中で印象に残ったことが、冒頭に述べた意見交換会です。出発前に元島民の方から、授業では先生から北方領土について学びましたが、同じ中学生がこの問題を、どの

ように考えているのか、とても興味がありました。意見交換のテーマは「北方領土問題を知ってもらうためには」でした。

私は意見として、SNSを使って発信、返還運動、署名活動への参加という意見を提案しました。SNSを使えば、若者に問題を知ってもらえる、また拡散できる利点があると考えます。返還運動、署名活動に参加することで、多くの人に知ってもらうきっかけになると考えます。

他の人の意見として、チラシ、ポスターを作る、元島民の方から話を聞く、今回のような派遣事業を増やす、などの意見でした。

意見交換を通じて、多様な方法を知りました。元島民の方の高齢化が進んでいるからこそ、私たち中学生を始めとする若者が、北方領土問題を理解する必要があることに気が付きました。

今までは北方領土と聞くと、四島がロシアに占拠されている、としか考えることができませんでした。しかし、今回いろいろな方から話を聞き学ぶことで、私の考えは大きく変化しました。

北方領土とは、私たちの先祖が開拓した土地です。様々な条約が結ばれましたが、一度も外国の領土にはなってい

ません。歯舞群島の貝殻島までは、三・七キロメートルしか離れていません。それなのに、なぜ日本人は行くことができないのでしょうか。

戦後七十四年が経った今日も、四島は返ってきていません。四島が返還されると、日本は今よりも水産資源が豊かになると思います。そのために私は、学んだことを多くの人に伝えていきたいと考えています。また、返還運動や署名活動に一人でも多くの人に参加してほしいと思います。私が直接、ロシアとの会談の席には行けませんが、返還に向けての後押しを生涯行っていきたいです。

この問題は、北方領土に関わっている人だけの問題ではありません。日本国民全員の問題です。一人でも多くの人に興味・関心を持った時、返還への一歩を踏み出せるのではないのでしょうか。その一歩が一日でも早く訪れることを心から願っています。

富山県教育委員会教育長賞

北方領土と私たち

黒部市立高志野中学校 三年 久才 喜子

私の学校では、三年生になると、北方領土学習に取り組むことが伝統となっています。北方領土についての文献や資料を読んで領土の地理や歴史を調べたり、元島民の方々からお話を聞いたりして、自分で決めた北方領土に関するテーマについて追究しています。そして、この学習の最後には、北方領土についての個人新聞を作成することになっています。私は、調べている過程で、思ったことがいくつかありました。

まず、一つ目に北方領土と自分との関わりについてです。私の住んでいる黒部市は、昔北方領土に住んでおられた元島民の方が多数おられます。私は、黒部市に住んでいても、北方領土への直接的な関係はほとんどないと考えていました。ところがある時、新聞の記事の作成をするため、家族に北方領土について何か知っていることはないかと尋ねました。すると母が、「祖母なら色々知っているは

ずだ。」と言うので、祖母の家へ行き、北方領土について聞いてみることにしました。そこで私が祖母に聞いた話は、まさに衝撃的と言ってよいものでした。実は、祖母も元島民だということです。私は、まさか祖母が元島民であると思ってもよらなかったもので、身近にいるものなのだと驚かされました。祖母から当時の島の自然、暮らしの様子、仕事の内容などを教えてもらいました。そして最後に、祖母は引き揚げの日の話をしてくれました。祖母は終戦直後は北方領土にいたそうです。当時、祖母は三歳だったので何が起こったのか良く分からなかったけれど、後になってから、ソ連の上陸について知らされたそうです。祖母は根室から近い水晶島に住んでいたもので、ソ連軍と鉢合わせすることなく帰ってくる事ができたと言っていました。けれども、択捉島や国後島に住んでいた人たちの中には、運悪くソ連軍に捕まり、極東シベリアに抑留された人たちもいたそうです。そんな話を聞いて、私は心が痛みました。同時に、私は祖母が元島民という形で北方領土とつながっていることを知り、北方領土が少しだけ身近な存在に感じようになりました。

十一月に学校でも元島民の方々にお話を聞く機会があり、その時にクラスで質問をする時間がありました。そこ

で出た質問の中に、「北方領土、二島返還は賛成？反対？また、もし北方領土が返還された時には何をしたいか？」というものがありました。その時、元島民の方は、「二島返還は反対です。」と明言されました。私は、早く返ってくるなら二島返還でもよいのではないかと考えていたので大変意外でした。元島民の方は続けて、「二島だけ返還されれば良いという考え方は違うと思うんです。返還されない残りの二島に住んでおられた方々もいますし。早く返ってくることだけが大切なことではないと思うんです。先に二島を返して、後に残りの二島も返していただけるならいいんですがね。」とおっしゃっていたのが印象的でした。

私は祖母の話や元島民の方々の話を聞いて、リアルな声が聞けてよかったと思いました。その声は北方領土について前向きな声もあれば、後ろ向きな声もありました。しかし、私はそういった声も含めて北方領土問題に向きあっていかなければならないと感じました。領土問題は、国同士が関わっている国際問題だから、すぐにどうこうできる簡単な問題ではないと思います。しかし、返還に向けた運動に参加することや、周囲の人に北方領土について伝えていくことが何よりも大切だと確信しました。そして、若い世代である私たちが改めて深く考え、解決策を見出していく

責任があると強く感じています。

富山県市長会会長賞

北方領土について考える

黒部市立鷹施中学校 三年 和嶋 湖

この作文を読んでいるあなたは北方領土を知っていますか。北方領土とは、国後島、色丹島、歯舞群島、択捉島からなる、日本固有の領土です。しかし、戦後すぐにソ連により不法占拠され、今もその不法占拠は続いています。それに対し日本は返還を求めています、その見通しは立っておらず、北方領土問題は解決していません。

そんな中、私は今年九月、北方四島交流訪問事業に参加しました。北方領土問題は詳しく知りませんが、参加の募集がかかったときに、ニュースでこの問題が取り上げられていて、興味があったため、参加しました。

根室から丸一日船に乗って択捉島まで行きました。択捉島に上陸してまず思いました。

「ここは日本ではない…外国だ。」

見るからに日本人が住んでいる様子はなく、建物は原色ばかり。元々日本人が住んでいた日本の島とは思えませんでした。上陸してからは、市街地散策やホームビジット、スポーツ交流など、たくさんの方との交流と体験をしました。その中で最も印象に残っているのは、ホームビジットです。私たちのグループは英語の教員をしている方の家を訪ねました。その方はとても優しく、伝わらない事もたくさんあったけど、頑張って伝えようとしてくれました。おもてなしもしてくれました。だけど、日本の島に住んでいる、とは思っていません。日本に興味があるか、と言われるたらそうでもなさそうだったのが印象的です。土産に越中おわら風の盆の絵が描いてある紙風船を持って行ったのですが、あまり興味を示していないように見えました。

今の択捉島では、ロシア人がロシア国に住んでいるように普通に生活を送っています。日本人として、その方々に日本の文化、生活、そして実態を今よりもっと伝えられたらいいと思いました。しかし、日本人だからと言って交流が返して欲しいという領土交渉の場になるような発言はしないように気を付けていました。

私は、先程も述べたように、北方四島交流事業に参加す

るまでは北方領土に興味があつたわけでもなく、自分には関係のない問題だと思つていました。しかし、今年、この事業に参加し、その考えは一気に変わりました。現在は、根室市を中心に北方領土返還を求めています。日本全体で動く、また変わってくると思います。きっと元の私みたいに、北方領土問題に興味がない人、自分には関係ないと思つている人はたくさんいると思います。私はそう思つている人たちに、実際に択捉島に行った身としてこの問題の現状、私たちができることを伝えていきたいと思つています。

日本人は解決するまでこの問題と向き合わなければなりません。今、自分が出来ることを考えて、返還に少しでも近づきたいです。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

私たち中学生には何が出来るだろう

黒部市立桜井中学校 三年 島 叶羽

「北方領土は日本固有の領土である。」私はこの言葉の意

味を国民一人一人が理解することで、北方領土問題解決の第一歩となると思う。そして、私たち中学生が北方領土問題解決について考えていくことで未来につながる事が多くあると思う。

北方領土は、日本がロシアより早く存在を知り、多くの日本人がこの地域に渡航し、生活を父祖伝来の地として受けついできたものである。しかし、一九四五年八月九日、ソ連は当時まだ有効であった日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後ソ連は北方四島のすべてを占領した。そして、法的根拠のない占拠が今でも続いているのだ。

日本では、この北方領土問題解決に向けて様々な取り組みが行われている。例えば、北方四島との交流として、ビザなし交流事業や、元島民がふるさとを訪問する「自由訪問」などが行われている。また、国民の意志を直接表明する手段として、北方領土の返還を求める署名活動が全国で行われている。中には、署名活動をするのがめんどうだと思ふ人もいるだろう。しかし、少しずつの取り組みによって、北方領土問題が解決するのなら、参加するべきだと私は思う。

日本が、こんなにも北方領土を返してほしいと思つてい

るのに、なぜロシア側は返してくれないのだろうかとは私は疑問をいただいていた。しかし、ロシア側の考えとしては、北方領土は第二次世界大戦の結果、ロシアが正当に得た領土である。固有の領土だとする日本の主張は、ロシアの歴史観と相容れないと強調している。また、プーチン大統領も就任以来、「戦勝国」としての誇りを強調している。このことから、ロシアは、北方領土を返してくれないのだと思った。だが、元島民の方からすると、自分の大事なふるさとをうばわれてしまっているのだから、子供の時にはなれてしまったふるさとを返してほしいと思うことは当然のことだと思う。

そして、北方領土に住んでいた元島民の平均年齢は、八十四歳であるのだ。少しでも早く島を返すことが元島民の方たちにとって何より嬉しいことだと思う。

では、私たちができることは何があるだろう。大人の人たちに比べれば、私たち中学生にできることは限られてくると思う。しかし、初めにも言ったように、まずは、北方領土は日本固有の領土であるということを忘れないこと。また、各県で行われている署名活動に参加すること。SNSなどによって、北方領土問題について取り上げること。北方四島について私たち自身がこれまで以上に知ることな

ど、私たちにもできることはある。

このことから、次世代へとつなげていける活動はこれから先も続けていくべきであると思う。

私は、自分の考えとしては、北方領土は日本の領土であることをロシアに認めさせる。しかし、北方領土には、ロシアの人も日本の人も移住して良いことにする。だがこれだけだと、ロシアはきつと条件を認めてくれないと思う。そのため、海産物をとれる範囲を日本よりロシアを広くすることによって、ロシアにも、利益があるということにする。このように、北方領土問題解決に向けて自分の考えを持ち、未来へとつなげていき、北方領土問題早期解決に取り組みたいと思う。

入
選

返還運動を通して

黒部市立鷹施中学校 三年 猪上 優里

私が北方領土問題をもっと詳しく知りたいと思うきっかけになったのは、今年の夏に参加した富山県北方領土復帰

促進青少年少女北海道派遣事業です。それまでも、北方領土問題についてテレビや学校の授業で聞いたことがあったので何となくは知っていました。でもそれは、ほんの一部の情報で、私たちが住む黒部とは、全く関係がないと考えていました。派遣事業では、黒部と北方領土との関わりについて生きた話を聞くことができました。私は、ロシアに北方領土が不法に占領されたときの引揚者の中で富山県民が二番目に多いということを知りませんでした。黒部市にも多くの元島民の方が今も暮らしているそうです。私は、その話を聞いて、自分の知っている黒部の新しい一面を知ったような不思議な気持ちになりました。私たちが知らないだけで、黒部と北方領土とは、深いつながりがあったのです。

北海道では、北方領土問題に関する資料をたくさん見ました。北方領土が不法に占拠された当時の厳しい状況が伝わって来ました。自分が育った土地、育った家に帰ることができないというのは、どんなに苦しいことなのでしょう。ある日、自分の生まれ故郷が他の国に奪われるなんて、私には想像もできません。

根室で行われた北方領土返還要求大会にも参加しました。署名運動なども行われていて壇上では、様々な人たちが

が北方領土への思いを語っていました。大会参加者の中には、元島民の方の姿もあり、故郷への思いや当時のことを教えて下さいました。「故郷を返してほしい」という切実な願いが伝わってきました。元島民の平均年齢は、八十四歳にも上っているそうです。四島が返還されたとき、心からそれを喜んでくれる人が少しでも多く残っている内に、北方領土を取り戻す必要があるのではないのでしょうか。北方領土問題の一刻も早い解決が望まれます。

返還運動を通して感じたのが元島民の方など返還を目指して活動する人々とそうでない人々の温度差でした。大切なのは、皆の心を一つにし、北方領土問題を真剣に考え、向き合うことです。四島に関わる方々が年齢を重ねていますが、この問題を決して風化させてはいけません。私たちに出来ることはわずかかもしれませんが、活動を通して学んだこと感じたことを伝え、少しでも多くの方に北方領土問題について知ってもらうことです。黒部市民として、日本国民として、一刻も早い四島返還を強く願っています。

北方領土と私たち

黒部市立鷹施中学校 三年 瀧 若菜

「北方領土問題のことは、富山県の人なら知っておかなければいけない。」二年生の社会科の授業のときに先生がそう言ったことがとても印象に残っています。そのときの私は北方領土は日本の領土であるにも関わらず、ロシアに不法占拠されているということしか知りませんでした。そのため、なぜ富山県と関係しているのだろうかという疑問が残っていました。

三年生になり、北方領土についての授業を通してその疑問は解決されました。富山県は、江戸時代から北海道と交流があり、その後も歯舞群島などに出稼ぎに行つてコンブ漁を行うなど富山県と北方領土には昔からつながりがあったことを知りました。富山県の文化は江戸時代から受け継がれ、北方領土へ渡つた漁民たちが支えた大切な文化なんだと思いました。他にも、北方領土の返還運動がずっと続けられていることや解決に向けて相互交流が行わ

れていることなどを学びました。その授業の中で、今の択捉島の写真を見ました。私はその写真を見て驚きました。今の択捉島はほぼ外国でした。右側通行の車、映っている外国人、外国語で書かれたもの、それらを見ると本当に、ロシアの人たちが住んでいるということ強く感じました。

十月四日に、実際に北方領土へ出稼ぎに行っていた方のお話を聞きました。当時は、魚貝類をとって食べるという生活をしていて、大きな缶詰工場もあったそうです。もし返還されたら漁業がしたいとおっしゃっていました。でもそれと同時に、海に魚が生存していないかもしれないという悲しい現実も知りました。その言葉を聞いて私は、とても言葉では言い表せないような悲しく、そして苦しい気持ちになりました。

その方は、ロシアやロシアの人たちに対して、北方領土は自分たちの領土であることには変わらないのでゆずりたくない、返還を求めることはやめたくないという思いが強いとおっしゃっていました。しかしその反面、今、北方領土に住んでいるロシアの人たちにとっても北方領土は故郷なので返還されても共存しなければいけないのではとも話しておられました。

入 選

私はお話を聞いて、北方領土問題は日本に住む人たちが皆で考えなければいけない問題だと思いました。特に、北方領土と深く結びついている富山県に住む私たちが、率先して北方領土のことについて、周りの人に伝えていかなければいけないと思いました。そして、北方領土問題が解決し、誰もが幸せに暮らせる日が一日でも早く来るよう、願っています。

北方領土問題

黒部市立高志野中学校 三年 岡本 康生

僕は富山県の黒部市に住んでいます。その中でも僕は生地という漁業の盛んな地域で暮らしています。そういう地域で暮らしているからか、僕は小さい頃から海に興味がありました。海は世界中の国や人々をつなぐ大きな橋のようなものです。日本は島国で、四方を海に囲まれています。「陸地では外国と国境を接していないけれど、海と海で外国とつながっている。」そう考えると、遠いような周りの

国々にも親近感が感じられます。そして、小学校や中学校の社会科を通し、世界と日本のつながりについて学びました。世界と日本について学んでいくごとに、以前より、外国に対して親近感を持つようになりました。

しかし、日本には外国より近いにも関わらず、行くことができない領土があります。外国より近いのに行けない、つまり他国に占領されている場所です。その場所というのが北海道の北に位置する択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々、いわゆる「北方領土」です。そして北方領土と僕の住んでいる黒部市にはとても深いつながりがあるので

す。
北方領土をめぐる問題の歴史は今から約七十年前の一九四五年から始まっています。一九四五年の日本は太平洋戦争中でした。四一年に開戦した太平洋戦争は、初めこそ日本が優勢でしたが、次第に日本は劣勢になり、四五年には日本本土が空襲を受けるようになっていました。その頃アメリカは日本を一日でも早く降伏させるためソ連に対して参戦をヤルタ会談で要求しました。当時、ソ連は日本と中立条約を結んでいましたが、勝利後に南樺太と千島列島を譲渡するという条件で参戦を決定し、この会談の後、ソ連は日本に宣戦布告し、満州や千島列島を次々と占領して

いったのです。これが現在の北方領土問題のきつかけとなりました。

現在も、北方領土はソ連の継承国であるロシアに占領されている状況です。しかし、何故日本とロシアが何十年も会談を重ねてきているのに、問題の解決の糸口が見つからないのでしょうか。それはロシアの北方領土に対する認識が原因です。ロシア人の多くは北方領土を「戦争で勝ちとった正当な領土」と考えており、その正当な領土を日本へ返還することはロシア人にとってありえないことなのです。また、北方領土を含めた千島列島は、ロシアにとって軍事的価値が大きく、これもロシアが返還に応じない理由の一つです。

僕は、先日、学校の授業で元島民の方からお話を伺う機会がありました。ある元島民の方は小学校の頃まで歯舞群島に住んでおられたそうですが、ソ連軍がやってくることも島を追いだされ、富山へ戻ってきたと語っておられました。僕はその方に自分で疑問に思う点について色々質問させていただきました。どの質問に対しても丁寧に回答していただきましたが、その中で一番印象に残っているのが「北方領土問題についてどのように思われますか。」という質問に対して、「日本とロシアが友好的な関係を築き、

平和条約を結んで北方領土問題に向き合ってほしい」という言葉でした。

作文の初めに「海は世界を結ぶ橋だ。」と述べました。しかし、日本と北方領土は同じ国にも関わらず、その橋を渡って行くことができないのです。北方領土が占領されてから七十年以上が過ぎました。このままの状態では北方領土はいずれロシアの土地という認識が完全に定着してしまうと思います。元島民の高齢化が進み返還運動が下火になっていく中、北方領土返還は困難であると思います。しかし、日露が友好的な関係を築き、解決の糸口を探ることは可能です。海を世界を結ぶ橋にするために、僕達若い世代は、北方領土問題に真剣に向き合わなくてはならないと思います。

共に生きること

黒部市立高志野中学校 三年 野口 凧沙

「北方領土は、日本がロシアに返還を求め続けている日本固有の領土である。」

これが北方領土について詳しく調べる前の私の認識でした。小学生の時も、テレビや授業で「北方領土」の話題はよく耳にしていました。その時はそれほど関心もなく、ただただ言葉を書き写し、知識が一つ増えたという感覚しかなかったような気がします。これまで教科書に出てくる「北方領土」の四文字はぼんやりと目に映っていただけで、私の中で特に意識された存在ではありませんでした。しかし三年生になり、北方領土について調査研究をしていく過程で、黒部市が北方領土とのつながりがとても強く、私の通う高志野中学校は、北方領土問題に特に深く関わっている学校であることが分かりました。また、日本と外国の関係の重要性について考えることも増え、国際的なニュース情報にも敏感になったような気がします。北方領土学習を

進める中で、「日本とロシア、両国にとってベストな方法はないのだろうか。」ということが私にとって重要なテーマになりました。

元島民の方を招いた出前講座の中で、「現在、北方領土はロシアによって手が加えられています。今からでもロシア人と日本人の共存は可能だと思いますか。」と質問しました。この質問に対して島民の方は、「かつては、ロシアの方も『共存』を望んでいましたが、現在は難しい。」と答えられました。ロシア政府は北方領土に住むロシア人に、たくさんのお金や土地を支給してくれるため、北方領土に住むロシア人はとても裕福な生活を送っているそうです。そのため、現在のロシア人は今の暮らしを維持しようという気持ちが強く、共存の思いは以前よりも段々弱くなっているように感じると言われました。

私は自分の中では「共存」がベストな方法だと思っています。「共存」という考え方は元島民の方々にとっても、日本にとっても実に不明確なものであり、抵抗があることは事実だと思います。しかし、北方領土問題について日露両国で協議してきたこの何十年の間、「四島返還」、「二島返還」の具体的な道筋は未だ見えていません。今、国際社会は「多文化社会」や「異文化理解」の重要性をうたって

北方領土の現実と問題

富山市立芝園中学校 三年 秋吉 信征

います。そんな世の中だからこそ日露で共生社会を創造する姿勢を世界へ示し、より両国の関係を深めていくことが重要なのではないかと考えます。もちろん様々な困難な課題があるとは思いますが、文化の違いや、考え方の違いを認め合うことで、お互いに支え合って共存していける方法を探し出していくことができるのではないかと思います。初めは言葉や文化を理解できず、気持ちを伝えることも難しいと予想されます。しかし、それは相手も同じです。同じ場所で暮らすのだから、何も言われなくても、おそらくお互いを理解しようと努めるように思います。その過程で築きあげていく人と人との信頼関係は、国境がどうか、歴史がどうかであったからということを超越したつながりを生むと思います。

私はこれからも領土問題に関心を持ち、たくさんの人と意見を交わし合い、自分にできることを考えていきたいと思えます。

「北方領土」という言葉を聞いて、僕は、日本が一方的に返還を求めている地域、将来のビジョンが不透明でインフラなどの発展が遅れている地域という印象をもっていました。しかし、北方領土問題が再燃してきた今、日本の未来を担う一人として、北方領土問題を理解し、解決に向けて考えていくことが必要だと思い、北方領土について調べました。

そもそも、北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々からなり、古くから日本が自国の領土として治めてきました。北方領土の総面積は、約五〇三六平方キロメートルで、現在の住民のほぼ一〇〇%が旧ソ連の人々によって構成されており、日本人の定住者はいません。なぜなら、一九四九年にソ連が日本人を強制退去させたからです。その後、現在に至るまで何度も会談が行われてきましたが、いまだに問題は解決しておらず、日本とロシアの

間に平和条約も結ばれていません。

今回、北方領土について調べてみて、特に興味深かったことは、北方領土の自然や地域風土についてです。「黒く見える島」という意味のアイヌ語に由来した国後島では、その名の通り、北海道から、羅臼山が黒く望むことができ、火山が多く存在することから、北方四島有数の温泉の宝庫となっています。また、この国後島は、日本との交流が最も盛んな島で、町には日本の中古車が走り回り、家庭内には、日本製品があふれています。この他にも、択捉島には、真珠湾攻撃のために旧日本連合艦隊が集結した単冠ひとかぶ湾などの歴史的な場所があり、今までは、何もない島だと思っていたけれど、その島ならではの魅力や特徴があることが分かりました。

これに対して、疑問に思ったこと、考えなければいけないと思ったことは、返還が実現した後はどうなるのかということです。実際北方領土では、貧富の差が激しく、慢性的な物不足に陥っています。ロシア側からは世界の果てとよばれている地で生活していくことができるのか疑問に思いました。NHKにより実施されたアンケートからは、「返還されたら北方四島に住むことができるか」という質問に対して、できる二九%、できない六〇%という結果に

なり、仮に返還されたとしても自治を行い活性化させていくことは可能なかどうか、日本全体の問題として考えていく必要があると思いました。

今年五月、国会議員が北方領土問題の解決方法をめぐり、戦争に言及したという問題が occurred。このような、関係者への配慮を欠き、他国からの反発をうけるおそれもある発言はあつてはならないと思うし、当然のことだけれど、武力ではなく、話し合いでの平和的解決に向けてこれからも議論を続けていくべきだと思います。

今回、北方領土について調べてみて、たくさんの方の文化や深刻な生活状況、そして返還に対する考え方の違い等、今までの僕のイメージと違うことをたくさん知り、考えることができました。これから領土問題を進めていく上で、領土を拡大することも大切ですが、それ以上にその場所を一番大切に思っている人達のことを考え、その人達が少しでも早く安心して暮らせるようにすることが大切なのではないかと思えます。一人の日本人として、この問題に向き合い、自分にできることを考えていきたいです。

領土問題解決に向けて

富山大学人間発達科学部附属中学校 一年 天谷 果愛

私は毎日、新聞を読んでいます。終戦の日の新聞に、北方四島ビザなし訪問団の記事がのっていました。日本国民と北方四島在住ロシア人が相互に訪問し、ホームビジット、文化交流会、意見交換会などを通して相互の理解と友好を深め、ロシア人の北方領土問題に対する理解を促し、日本に対する信頼感を形成させる目的で行われています。記事によると、島は年々ロシア化していき、現地住民たちの考えや意識も、以前は日本の島だということを前提にしたものが多かったのが、最近では変わってきているようです。北方領土が自分たちの大切なふるさととなっているロシア人も増えてきているのではないかなと思います。

テレビでセンチシヨナルに報じられる、竹島や尖閣諸島のニュースとは違い、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の返還をめぐる北方領土問題については、引きあげ者の多い富山県に住んでいても、身近に四島出身者がいなかった

たこともあって、今まで学校で習った歴史上の出来事の一つとして、特に意識はしていませんでした。しかし、終戦の日はふと新聞記事が目にとまり、家族でどうしたら北方領土問題が解決するだろうか、と話し合いました。なぜ日本の主張が通らないのか、なぜロシアは占領したままなのか。どちらの国にも、百パーセント自分の国の領土だという主張があります。しかし、ふるさとを追われ、つらい思いをしてきた元島民の方々が、私たちの暮らしている日本におられるのは事実です。もし、領土が日本に戻り、島が日本人の住む環境に戻ったとして、これが全て解決したと言えるでしょうか。それはロシア住民の生活や現在ふるさとと違って育った住民の思いを踏みにじり、新たな領土問題の種を作ることになってしまうと思います。日本の国益、ロシアの国益、お互いの主張は平行線です。解決に至らず戦後七十四年が過ぎました。平行線は小学校の算数にも出てきますが、永遠に交わることはありません。角度をつけるか、折れるかしないと交わらないのです。日本固有の大切な領土である北方四島。平和的に解決するためには、お互いの意見をよく聞いて歩み寄り、対話を重ねることが必要だと思います。ビザなし訪問団の交流事業も、欠かしてはいけないことです。これらの活動は、必ず北方領

土問題の解決を前進させるために役立つでしょう。そして私たち中学生は、この領土問題を他人事ではなく、自分事として興味関心を持ち、考えることが必要です。さらに、「関わりたい」「応援したい」という気持ちを生み出し、元島民の方々の思いをつなげ、語り継いでいかなければならないと思います。

入 選

北方領土について思うこと

富山大学人間発達科学部附属中学校 一年 岡田理紗子

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々のことです。これらの島々は、もともと日本の領土でした。しかし、第二次世界大戦終了直後、当時のソビエト連邦によって不法に占領され、現在のロシアに引き継がれ、現在に至っています。そして今、日本の返還要求に対して、ロシアは自国の領土であると主張しています。

北方領土問題は、日本の領土問題において尖閣諸島、竹島の領土問題と同様、日本にとって関わりの深い問題であ

るという事を学校の授業で学びました。

北方領土の周辺は、寒流の千島海流と暖流の日本海流がぶつかるところでとてもよい漁場です。しかも金、銀、銅などの地下資源が豊富です。この四島を失うと二百海里経済水域もなくなるので、漁業の面でも地下資源の面でも大きな影響をうけることになります。北方領土はとても価値のある島なので、ロシアは、手放したくないでしょう。

尖閣諸島には人が住んでいないけれど、北方領土の島々には、ロシア人が住んでいます。この作文を書くにあたっていろいろと調べているうちに島から追い出された島民がいることも知りました。このことは教科書には書かれていなかったし、ニュースでも北方領土問題は解決に向けて議論が進められていることしか報道されていないのであまりくわしくは知りませんでした。もともとは日本人が住んでいたのに追い出され、今はロシア人が住んでいます。日本人は再び住むことはもちろん立ち入ることも近寄ることすらできなくなっています。そこに残してきた先祖の墓参りも自由にできないのです。そのことに苦しんでいる人々、もう一度ふるさとに帰りたいと願って、ふるさとを想いながらふるさとに戻れない人々がたくさんいるのです。

しかし北方領土がロシアに占領され七十年以上たった現

在、四島に住んでいるロシア人にとっても生まれ育ったふるさとなのです。ある日突然、故郷をおわれたとしたら、

これはかつて私たち日本人がされたことと同じです。今や北方領土は日本人にとってもロシア人にとっても大切なふるさとになっています。ふるさとを大切に思う気持ちは、日本人もロシア人も同じだと思います。

北方領土問題の解決は、本当に難しいと思います。長い時間をかけても両国が納得できる結論をだしてほしいと思います。北方領土の返還を待ちわびている日本人の思いと、北方領土で生まれ育ち、そこがふるさとになっているロシア人の思い、その両方を大切にする解決策でなくてはならないと思います。そして領土問題の解決は、自分の国の利益を守るためではなく、国同士の友好な関係を築くためでもあると思います。お互いに理解しあい、交流を深め、日本とロシアが友好関係を築くことがこの北方領土問題を解決する方向に導いてくれるかもしれません。中学生の私にはとても難しいですが、今自分のできることは何だろうということを考えながら、少しでも北方領土問題の解決に向けて力を貸すことができればいいなと思います。

入 選

北方領土問題について

南砺市立城端中学校 二年 山本茉由子

私は、北方領土問題が解決し、北方領土が日本人とロシア人どちらも住める場所になってほしいです。

そのために、まずは日本とロシアの相互交流を継続していくことです。平成四年から現在まで、相互理解を深めることを目的に「日本国民と北方四島在住のソ連人との交流の拡大および日本国民による北方四島への旅券・査証なしの訪問」が行われています。私はこの活動を継続することが大切だと思いました。実際に交流で相互理解が進み、友好が深まるなどの成果がでていそうです。この活動を続けることでさらに友好が深まり北方領土問題がはやく解決されるのではないかと思います。そして、二つの国が幸せに暮らせる日が来るのではないのでしょうか。

しかし、交流を続けるだけでは、元島民が少なくなっている今、問題解決には足りないと思います。そのためには、国民一人一人が北方領土問題について考えることが大

切だと考えました。国民全員が問題解決を訴えることでロ

なところになってほしいです。

シア側も問題について考え解決に向けて進むからだと思
います。そこで私は、二月七日の「北方領土の日」にロシア
の歴史を学んだり、北方領土の歴史や地理を学んだりして
北方領土問題について少しでも考えてもらえるようにすれ
ばよいと思います。また解決に向けては具体的に、問題解
決に向けてのメッセージをロシア語でロシアに送るなどの
活動もすればよいと思います。他にも給食にロシアの料理
や北方領土でとれたものが出たりと私たちとも少しでも交
流できる日にすればよいと思いました。こうして国民一人
一人が少しでも北方領土問題について考えることができ
て、解決も進むと思います。また、日本とロシアの人が住
めるようなことができればいいなと思いました。

私は北方領土問題が日本とロシアのどちらも納得のいく
解決になればよいと思います。現在ロシアが北方領土を不
法占拠してから約七十年がたちます。すると元島民は年々
少なくなり、問題について関心が薄れていっていると思
います。でも、また島に戻って住みたいという元島民がいま
す。そして北方領土に住むロシア人も生活に慣れて追い出
されるのはいやだと思います。だからこそ、はやく問題が
平和的に解決して、日本人とロシア人が仲良く住めるよう